



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	中級会話授業に於けるフィードバックに関する考察・その2：個人のデータの分析を中心に
Author(s)	中村, 重穂
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 2, 116-137
Issue Date	1998-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/45567
Type	departmental bulletin paper
File Information	BISC002_010.pdf



中級会話授業に於ける フィードバックに関する考察・その2 —個人のデータの分析を中心に—

中 村 重 穂

要 旨

本稿では、筆者が中村（1997）に於いて検討した中級会話授業に於けるフィードバックの結果をさらに全体の誤用比率の推移と個々の学習者の誤用比率の推移の相関という観点から再検討したものである。

その結果、4月期の学習者の場合には、学習者全体の減少傾向と個々の学習者の減少傾向とが合致すると認められる項目が10項目中7項目を数えたが、10月期の学習者の場合には7項目中僅か1項目にとどまった。この原因として、学習者の誤用の数値処理上の問題及び各期の誤用の全体数の推移と個別項目の推移のバランスの問題を指摘し、また、フィードバックのあり方について再検討を加え、今回の方法の中では「発話の聴取による誤用の意識化」のみが有効な方法であることを析出した。

併せて、項目の性格の再検討を行うと共に今後必要とされるフィードバック研究の方向として、数値処理の改善、フィードバックの方法自体の改善、会話の「上手さ」の実態に関する研究と、その指導及びフィードバックへの還元の四つを示した。

〔キーワード〕 フィードバック、文法項目、誤用訂正、学習者全体の傾向と個々の学習者の傾向、会話の「上手さ」

1. 問題の所在

筆者は、中村（1997）（以下、前稿と略）に於いて、中級レベルの会話授業で学習者に対して行ったフィードバックと文法上の誤用の増減傾向との関係を考察し、その結果得られたこととして以下の5点を提示した。

- 1) 文法上の誤用を対象としたフィードバックのある程度の有効性
- 2) 学習者の発話テープ聴取とその文字化資料提示が誤用の意識化とフィードバックの効果促進に与える有効性

- 3) 個々の誤用訂正にとどまらない文法項目の(集中的な)復習の有効性
- 4) 特定の文法項目の重点化と復習によるフィードバックの効果促進
- 5) フィードバックを受け易い文法項目と受け難い文法項目の存在

しかし、同時にこれらに含まれる問題点として、第一に、前稿で「フィードバックの結果／効果」という表現で述べられている誤用の増減傾向がフィードバックの「結果／効果」と呼びうるものかどうか(＝他科目並習による影響の有無)という点を、また第二に、前稿でフィードバックの対象とした文法項目の誤用が学習者全体の誤用であったことから、「フィードバックの結果／効果」と言われているものが学習者全体に発生しているのか、一部の学習者のみの急激な誤用の減少を反映しているに過ぎないものなのかが不明確である点を、それぞれ指摘しておいた。

本稿は、前稿のこれらの問題を承けて、先の会話授業に於ける誤用の増減傾向を文法項目と学習者個々人の誤用の推移との関連から再度考察し、上記の、特に第二の問題点に対して解答を与えることを目的とするものである。なお、第一の問題点に関しては、筆者の会話授業実施学期の他科目の内容と学習者の並習状況の把握が既に困難であること及び分析に際して取り込むべき複数の因子とそれらの取り込みの方法論が不確定であるため、本稿に於いても採り上げないことにした。

2. 先行研究の概観

本章ではこれまでに現れたフィードバックをめぐる先行研究を概観しておくことにする。但し、前稿で採り上げた倉地(1994)、溝口(1995)、架谷・二村・津田・三好(1995)については本稿では省略する。

まず、横林(1992)は、英語学習者の発話の誤用と他者訂正に関する先行研究をもとに日本語上級学習者の討論に於ける誤用と訂正の分析を行い、英語学習者と同様の結果が認められることを述べている。この同様の結果とは、「1. 誤りの訂正率は低い 2. 訂正は主に語彙レベルで文法や発音に関するものは殆どない 3. 誤訂正は殆どない 4. 直接的訂正と間接的訂正の両方を使う等」(横林1992:49)であるが、この研究では、学習者の訂正の実態とその意識・心理の分析は述べられていても、その訂正によって学習者の誤用がどのように低減化したのか／しなかったのかについては述べられておらず、今後の研究の方向や授業への提案等もなく、「研究のための研究」という印象を拭いきれない。

これに対し、倉八（1993）は、上級前期学習者に対するスピーチ指導の授業に於いて教師と聴衆（学習者）が評定表を用いて行ったフィードバックの結果について考察し、併せてスピーチ授業の効果的な指導について提言を行っている。倉八は、評定項目をコミュニケーションの観点から「文法的な正確さに関する技術」「聞き手に適した発話をする技術」「内容のまとまりに関する技術」「スピーチ方略に関する技術」の四つの大項目に分け、これらの項目に対する評価を学習者に還元するとともに評定表自体の改良をも行い、その結果、事前準備、資料の効果的な使用、要点の暗記、聴衆の反応に応じたスピードの配慮といった点に改善が見られたこと及び学習者が他者のスピーチから技術を自覚的に学んだことを挙げている。また、スピーチ技術の指導に際しては「語彙の量が適切であること」「スピードが適切であること」「スピーチの技術に注意して聴かせること」「スピーチが得意でない学習者についてはスピーチ技術上の補償をすること」（倉八1993：62）を効果的な指導法として提示している。この論考は、倉八本人も指摘しているように対象となった学習者数が少ない、日本人の聴衆の場合との比較検討が必要である等の幾つかの問題点を含んでいるが、実証的なデータに基づき学習者の改善点を示している点で、フィードバック研究の上で重要な示唆に富むものである。

また、前稿でも引用した横山（1996）は、ネガティブ・フィードバックの理論的背景と海外に於ける先行研究の概要を報告するとともに、従来の調査が「数も少なく、ある特定の状況での一つの言語側面のみに関してのもの」であることを指摘し、「文法を明示的に教授している場合が圧倒的に多い」と推察される日本語教育の状況下で、ネガティブ・フィードバックのあり方とその改善の問題を今後の研究課題として析出している。（横山1996：9）その上で、個別的なデータを蓄積していくことを提唱しており、研究の方向の一つを示している点で重要である。

加藤（1998）は、会話授業に於いて学習者のロールプレイを録画し、それを再生しながら「口頭で即時的フィードバックを行い、後日、コメントとして書面でも学生に与え」（加藤1998：2）するという実践を行ったことを報告しているが、これは他の教授活動・教授メディアと並行して行われている上に、これらの教授活動・教授メディアに対する学習者の性格付けと言語接触量の関連性を測ることが主目的であるため、上記のフィードバックの結果、学習者の日本語運用能力がどのように変化したのか／しなか

ったのかについての記述は見られない。

最後に、横井（1998）は、発音の指導に於けるフィードバックの方法とその効果の問題を採り上げており、発音の録音をもとに学習者の自己評価と教師のチェックを行い、問題点の多い発音、フィードバックで問題のあった人数の推移、問題点とその改善率のデータを示すことによって問題点の析出とそれらに対するフィードバックの効果を実証的に提示している。さらに横井は、学習者のフィードバックに対する意識が肯定的であり発音に対する意識の高まりが見られる等、学習者の情意面に対する調査及び今後の発音指導のための提言も行っており、その実証性、具体性、学習者への配慮、提言の有効性等の点でこれまでのフィードバック研究において画期的な位置を占めていると言ってよい。

以上がフィードバックに関する先行研究の概観である。

3. 授業の概要

本章では、筆者の担当した中級会話授業と学習者及び授業形態の概略を説明する。なお、詳細については中村（1997：85-94）を参照されたい。

- 1) 授業科目名：「一般日本語中級会話 2 b」（当時）
- 2) 実施期間：1996年度4月期（4月～9月）及び10月期（10月～1997年3月）
- 3) 時間数：両学期とも90分×2回/週×18週間（計54時間）
- 4) 授業の目的：
 - a. 口頭でのコミュニケーションに必要な様々なストラテジーの習得
 - b. フィードバックを通じての発話の問題点の把握とそれらを回避あるいは訂正できる能力の強化＝自己の日本語の意識化とモニター能力の伸長
- 5) 学習者（学期を通してのほぼ継続的な出席者）：
 - a. 4月期：7名（中国4名、タイ1名、ミャンマー1名、ポーランド1名）
 - b. 10月期：8名（中国5名、タイ1名、アメリカ1名、チュニジア1名）
- 6) 授業手順：

両学期とも第1週目はガイダンスとインタビュー、第2週目以降は週2回の授業のうち1回をタスク実施日（発話と録音）、他の1回を前回の発

話に対するフィードバック実施日とし、概ね以下の手順で授業を行った。

a. ルーティン A → 4 月期 8 週間 / 10 月期 3 週間実施

- ① story-telling と Nacherzählung (Ne)
- ② story 原典と学習者の Ne の照合
- ③ Ne に対する自己評価と誤用の原因についての報告 (→録音)
- ④ 上記③に含まれる誤用についてのフィードバック

b. ルーティン B → 4 月期 5 週間 / 10 月期 13 週間実施

- ① 一つのテーマについてコメンテーターによる意見陳述
- ② 質疑応答と論点の提示
- ③ 全員によるディスカッション (→録音)
- ④ 上記③に含まれる誤用についてのフィードバック

4 月期の最後の 3 週間はスキット / ドラマ作りのタスクを行って、その録画テープをもとにフィードバックを行った。いずれの学期にも最終回の授業時にはコース評価を提出させた。

以上が授業の概要である。

7) フィードバックの概要

a. フィードバックの対象項目：ルーティン A-③及び B-③に於ける学習者の発話に含まれる、特に文法上の誤用

b. フィードバックの方法：

- ① (事前準備) 学習者の発話の中から誤用箇所を取り出してつなぎ編集したフィードバック用テープとそれらを文字化して誤用箇所を指示したフィードバックシートを用意する。
- ① フィードバック用テープで誤用を聴き、訂正案を全員で検討する。
- ② 訂正をフィードバックシートに記入する。
- ③ 再度正確な形で発話練習を行う。

フィードバックに際して、4 月期には、接続表現、自動詞・他動詞、テンス・アスペクト・ヴォイス、疑問詞節 (疑問詞を含む) を重点項目として学期中に特別にこれらの項目に関する文法の集中的な復習を行った。これに対し、10 月期には、フィードバック用テープの聴取を行わずにフィードバックシートのみを用い、また、4 月期のように重点項目をたてることなくすべての誤用箇所に対して一律なフィードバックを行った。

以上が授業の概要である。

4. フィードバックによる誤用の増減傾向

前稿に記したとおり、フィードバックの対象となった文法項目は全部で22項目であり、以下にその増減傾向を示す。

表1は前稿と同一のものであるが、これらの項目の全学習者分の誤用比率（＝全誤用数に占める各項目ごとの誤用数の割合）の推移を4月期・10月期とも概ね4週間ごとに区切って示したものであり、表2は各期の個々の学習者の誤用比率の4週間ごとの推移を同様に示したものである。表3は22項目に関して、後述する傾向のそれぞれを示した学習者の数を表したものであり、項目自体の性格を見ようとするものである。そして、最後の表4は、各期の各項目について、①当該項目の誤用が前半2週間以内に消滅した学習者、②当該項目の誤用が後半2週間以内に新たに出現した学習者、③当該項目の誤用が全期間出現していた学習者、④当該項目の誤用が全期間出現しなかった学習者、の四つのタイプの数を表しており、表3を角度を変えて要約してみたものである。

表1～3の「傾向」の欄に現れる記号は、↑が増加傾向（＝学期開始後または第2期から一貫して増加）を、↓が減少傾向（＝学期開始後または第2期から一貫して減少）を、△が増加と減少を繰り返す不安定な傾向を、？は傾向の判断困難（＝第4期になってから第1～3期の傾向とは反対の傾向に転化）なものを、それぞれ表し、表3の傾向「0」は全期間当該誤用が出現しなかったことを表している。また、表2の個人データの表の左上に付された記号は学習者の識別記号であり、例えば[41P]は、この学習者が「4月期・学習者番号1番・国籍ポーランド」であることを表している。国籍の略記号は以下の通りである。

P→ポーランド／C→中国／T→タイ／A→アメリカ

各表の項目欄に共通して現れる「T・A・V」は「テンス・アスペクト・ヴォイス」の略であり、また、第1期～第4期の各期間は以下の通りである。（4月期第4期は夏季休業を、10月期第3期は冬季休業を含む。）

・4月期：

第1期：4月18日～5月9日
第2期：5月14日～6月6日
第3期：6月11日～7月4日
第4期：7月9日～9月12日

・10月期：

第1期：10月29日～11月12日
第2期：11月19日～12月19日
第3期：12月26日～1月30日
第4期：2月18日～3月4日

なお、前節5）に於いて学習者数を4月期7名、10月期8名とし、表1

もこれらの人数に基づいているが、これらの学習者はほぼ継続的に授業に出席しその出席率が70%以上であるものの、一部の学習者に関しては一つの期（4週間）の殆どを欠席するかまたはタスクの授業時のみ欠席すると

表1：4月期・10月期誤用比率（%）（全体）

誤用項目	4月期					10月期				
	1期	2期	3期	4期	傾向	1期	2期	3期	4期	傾向
助詞	27.5	25.4	29.1	19.8	△	22.8	28.5	34.6	39.9	↑
接続表現	14.3	10.5	9.9	9.5	↓	12.1	9.6	9.7	11.1	?
適切な動詞の選択	7.1	8.8	5.7	9.5	△	4.2	5.6	7.0	7.4	↑
適切な名詞の選択	7.1	1.1	6.4	7.9	↑	3.3	7.0	6.5	6.2	↓
動詞の活用	7.1	10.5	5.7	12.7	△	10.7	5.6	7.0	5.8	△
自動詞・他動詞	5.5	2.8	2.8	0.0	↓	1.9	0.0	3.2	1.2	△
T・A・V	5.5	8.3	6.4	4.8	↓	4.7	1.9	2.7	2.1	△
疑問詞節	4.4	8.3	1.4	0.8	↓	3.3	3.7	2.7	2.5	↓
話体	4.4	5.0	2.1	0.8	↓	7.4	1.5	3.2	2.9	△
副詞	4.4	5.5	10.6	4.0	?	4.7	8.1	3.2	2.1	↓
連体修飾	2.7	2.2	1.4	0.8	↓	3.3	4.1	5.4	3.3	?
発音・アクセント	2.2	0.6	2.8	5.6	↑	3.3	1.1	1.1	0.8	↓
名詞節	1.6	1.1	0.0	0.0	↓	1.4	1.5	0.0	2.1	△
語順	1.6	0.6	0.0	0.0	↓	0.5	0.7	2.7	1.6	?
不要な要素	1.1	3.3	6.4	7.9	↑	3.7	3.7	3.2	2.1	↓
意味不明な部分	1.1	0.0	0.7	3.2	↑	2.3	1.9	2.7	0.8	△
適切な形容詞の選択	0.5	0.0	1.4	0.8	△	0.9	2.6	2.2	0.8	↓
指示詞	0.5	2.2	1.4	0.8	↓	1.4	3.0	1.1	2.1	△
形容詞の活用	0.5	0.6	1.4	4.8	↑	4.2	5.6	1.1	4.1	△
文末表現	0.5	2.8	3.5	4.0	↑	3.7	3.7	2.2	0.4	↓
主語と述語の一致	0.0	0.5	0.0	0.0	↓	0.5	0.4	0.0	0.8	?
その他	0.0	0.0	0.0	0.8	?	0.0	0.4	0.5	0.0	?

表2：4月期・10月期誤用比率(%) (個人)

[41P]

誤用項目	1期	2期	3期	4期	傾向
助詞	30.0	14.3	4.5	25.0	?
接続表現	10.0	0.0	9.1	0.0	△
自動詞・他動詞	10.0	14.3	0.0	0.0	↓
T・A・V	5.0	14.3	9.1	25.0	△
疑問詞節	5.0	0.0	0.0	0.0	↓
動詞選択	15.0	0.0	9.1	0.0	△
名詞選択	5.0	14.3	18.2	0.0	?
動詞活用	5.0	0.0	9.1	25.0	↑
話体	0.0	0.0	9.1	0.0	?
副詞	5.0	0.0	13.6	0.0	△
連体修飾	5.0	14.3	0.0	0.0	↓
発音・アクセント	-	-	-	-	-
名詞節	-	-	-	-	-
語順	-	-	-	-	-
不要な要素	0.0	0.0	4.5	0.0	?
意味不明な部分	-	-	-	-	-
形容詞選択	0.0	0.0	9.1	0.0	?
指示詞	5.0	0.0	0.0	0.0	↓
形容詞活用	0.0	28.6	4.5	25.0	△
文末表現	-	-	-	-	-
主語と述語の一致	-	-	-	-	-
その他	-	-	-	-	-

[44C]

誤用項目	1期	2期	3期	4期	傾向
助詞	36.7	29.2	33.3	20.0	△
接続表現	10.0	4.2	16.7	0.0	△
自動詞・他動詞	6.7	0.0	0.0	0.0	↓
T・A・V	3.3	4.2	0.0	5.0	△
疑問詞節	0.0	4.2	0.0	0.0	↓
動詞選択	20.0	16.7	5.6	20.0	?
名詞選択	3.3	0.0	5.6	5.0	△
動詞活用	10.0	12.5	0.0	0.0	↓
話体	3.3	4.2	5.6	5.0	?
副詞	6.7	4.2	5.6	5.0	△
連体修飾	0.0	4.2	0.0	0.0	↓
発音・アクセント	0.0	0.0	11.1	20.0	↑
名詞節	0.0	4.2	0.0	0.0	↓
語順	0.0	4.2	0.0	0.0	↓
不要な要素	0.0	4.2	5.6	0.0	?
意味不明な部分	-	-	-	-	-
形容詞選択	0.0	0.0	0.0	5.0	?
指示詞	0.0	0.0	0.0	5.0	?
形容詞活用	0.0	0.0	11.1	0.0	?
文末表現	0.0	4.2	0.0	5.0	△
主語と述語の一致	-	-	-	-	-
その他	-	-	-	-	-

※「-」の欄は、その誤用が出現しなかったことを表す。

[42C]

誤用項目	1期	2期	3期	4期	傾向
助詞	33.3	14.3	46.7	10.0	△
接続表現	8.3	14.3	0.0	20.0	△
自動詞・他動詞	-	-	-	-	-
T・A・V	8.0	0.0	6.7	10.0	↑
疑問詞節	0.0	0.0	0.0	10.0	?
動詞選択	16.7	0.0	6.7	0.0	△
名詞選択	8.3	0.0	6.7	20.0	↑
動詞活用	0.0	14.3	0.0	10.0	△
話体	8.3	28.6	0.0	0.0	↓
副詞	8.3	0.0	13.3	0.0	△
連体修飾	0.0	0.0	6.7	0.0	?
発音・アクセント	0.0	14.3	0.0	0.0	↓
名詞節	0.0	14.3	0.0	0.0	↓
語順	-	-	-	-	-
不要な要素	8.3	0.0	0.0	0.0	↓
意味不明な部分	0.0	0.0	0.0	10.0	?
形容詞選択	-	-	-	-	-
指示詞	-	-	-	-	-
形容詞活用	-	-	-	-	-
文末表現	0.0	0.0	13.3	10.0	?
主語と述語の一致	-	-	-	-	-
その他	-	-	-	-	-

[45C]

誤用項目	1期	2期	3期	4期	傾向
助詞	41.7	23.1	47.1	8.3	△
接続表現	8.3	0.0	5.9	0.0	△
自動詞・他動詞	8.3	0.0	5.9	0.0	△
T・A・V	0.0	0.0	5.9	0.0	?
疑問詞節	0.0	15.3	0.0	0.0	↓
動詞選択	8.3	7.7	5.9	8.3	?
名詞選択	8.3	0.0	0.0	16.7	?
動詞活用	0.0	0.0	0.0	16.7	?
話体	8.3	7.7	0.0	0.0	↓
副詞	0.0	23.1	11.8	25.0	△
連体修飾	8.3	0.0	0.0	0.0	↓
発音・アクセント	0.0	0.0	11.8	8.3	?
名詞節	-	-	-	-	-
語順	-	-	-	-	-
不要な要素	8.3	15.3	0.0	0.0	↓
意味不明な部分	-	-	-	-	-
形容詞選択	-	-	-	-	-
指示詞	0.0	0.0	5.9	0.0	?
形容詞活用	-	-	-	-	-
文末表現	0.0	7.7	0.0	16.7	△
主語と述語の一致	-	-	-	-	-
その他	-	-	-	-	-

[43C]

誤用項目	1期	2期	3期	4期	傾向
助詞	50.0	40.0	0.0	19.0	?
接続表現	0.0	0.0	0.0	19.0	?
自動詞・他動詞	-	-	-	-	-
T・A・V	0.0	0.0	0.0	9.5	?
疑問詞節	12.5	20.0	100.0	0.0	?
動詞選択	0.0	10.0	0.0	19.0	△
名詞選択	12.5	0.0	0.0	0.0	↓
動詞活用	12.5	0.0	0.0	14.3	?
話体	0.0	20.0	0.0	0.0	↓
副詞	0.0	0.0	0.0	4.8	?
連体修飾	-	-	-	-	-
発音・アクセント	12.5	0.0	0.0	0.0	↓
名詞節	-	-	-	-	-
語順	-	-	-	-	-
不要な要素	0.0	0.0	0.0	9.5	?
意味不明な部分	-	-	-	-	-
形容詞選択	-	-	-	-	-
指示詞	0.0	10.0	0.0	0.0	↓
形容詞活用	0.0	0.0	0.0	4.8	?
文末表現	-	-	-	-	-
主語と述語の一致	-	-	-	-	-
その他	-	-	-	-	-

[101T]

誤用項目	1期	2期	3期	4期	傾向
助詞	22.2	18.8	30.0	36.8	↑
接続表現	0.0	25.0	0.0	5.3	△
自動詞・他動詞	-	-	-	-	-
T・A・V	0.0	6.3	0.0	5.3	△
疑問詞節	11.1	0.0	0.0	5.3	?
動詞選択	0.0	0.0	30.0	15.8	?
名詞選択	0.0	18.8	10.0	0.0	↓
動詞活用	11.1	6.3	0.0	10.5	?
話体	11.1	0.0	0.0	0.0	↓
副詞	11.1	6.3	0.0	5.3	?
連体修飾	11.1	0.0	0.0	0.0	↓
発音・アクセント	-	-	-	-	-
名詞節	11.1	0.0	10.0	0.0	△
語順	0.0	0.0	0.0	5.3	?
不要な要素	0.0	0.0	0.0	5.3	?
意味不明な部分	-	-	-	-	-
形容詞選択	-	-	-	-	-
指示詞	11.1	6.3	10.0	5.3	△
形容詞活用	0.0	12.5	10.0	0.0	↓
文末表現	-	-	-	-	-
主語と述語の一致	-	-	-	-	-
その他	-	-	-	-	-

[102A]

誤用項目	1期	2期	3期	4期	傾向
助詞	22.2	42.9	37.5	0.0	↓
接続表現	-	-	-	-	-
自動詞・他動詞	-	-	-	-	-
T・A・V	-	-	-	-	-
疑問詞節	-	-	-	-	-
動詞選択	0.0	0.0	0.0	100.0	?
名詞選択	11.1	14.3	25.0	0.0	?
動詞活用	0.0	7.1	0.0	0.0	↓
話体	0.0	7.1	12.5	0.0	?
副詞	11.1	0.0	0.0	0.0	↓
連体修飾	-	-	-	-	-
発音・アクセント	11.1	0.0	0.0	0.0	↓
名詞節	-	-	-	-	-
語順	-	-	-	-	-
不要な要素	11.1	0.0	0.0	0.0	↓
意味不明な部分	-	-	-	-	-
形容詞選択	0.0	7.1	12.5	0.0	?
指示詞	0.0	7.1	12.5	0.0	?
形容詞活用	0.0	7.1	0.0	0.0	↓
文末表現	33.3	0.0	0.0	0.0	↓
主語と述語の一致	0.0	7.1	0.0	0.0	↓
その他の	-	-	-	-	-

[105C]

誤用項目	1期	2期	3期	4期	傾向
助詞	30.8	38.1	48.3	53.6	↑
接続表現	30.8	9.5	13.8	7.1	△
自動詞・他動詞	0.0	0.0	6.9	0.0	?
T・A・V	7.7	4.8	3.4	0.0	↓
疑問詞節	7.7	4.8	0.0	0.0	↓
動詞選択	0.0	0.0	3.4	3.6	↑
名詞選択	15.4	4.8	3.4	7.1	?
動詞活用	7.7	0.0	6.9	7.1	↑
話体	0.0	4.8	0.0	10.7	△
副詞	0.0	9.5	0.0	0.0	↓
連体修飾	0.0	0.0	6.9	3.6	?
発音・アクセント	0.0	0.0	3.4	0.0	?
名詞節	-	-	-	-	-
語順	0.0	4.8	0.0	0.0	↓
不要な要素	0.0	4.8	0.0	3.6	△
意味不明な部分	0.0	4.8	0.0	0.0	↓
形容詞選択	0.0	0.0	3.4	0.0	?
指示詞	0.0	0.0	0.0	3.6	?
形容詞活用	0.0	9.5	0.0	0.0	↓
文末表現	-	-	-	-	-
主語と述語の一致	-	-	-	-	-
その他の	-	-	-	-	-

[103C]

誤用項目	1期	2期	3期	4期	傾向
助詞	40.5	23.9	40.9	40.0	△
接続表現	13.5	15.2	13.6	13.3	↓
自動詞・他動詞	0.0	0.0	0.0	2.7	?
T・A・V	2.7	0.0	0.0	0.0	↓
疑問詞節	0.0	6.5	6.8	5.3	?
動詞選択	2.7	4.3	11.4	10.7	?
名詞選択	5.4	4.3	6.8	2.7	△
動詞活用	5.4	4.3	0.0	2.7	?
話体	13.5	0.0	0.0	2.7	?
副詞	0.0	13.0	4.5	2.7	↓
連体修飾	0.0	10.9	4.5	0.0	↓
発音・アクセント	0.0	0.0	2.3	2.7	↑
名詞節	0.0	2.2	0.0	0.0	↓
語順	0.0	0.0	0.0	1.3	?
不要な要素	8.1	8.7	9.1	0.0	?
意味不明な部分	2.7	0.0	0.0	1.3	?
形容詞選択	0.0	0.0	0.0	1.3	?
指示詞	2.7	0.0	0.0	2.7	?
形容詞活用	0.0	4.3	0.0	6.7	△
文末表現	2.7	2.2	0.0	1.3	?
主語と述語の一致	-	-	-	-	-
その他の	-	-	-	-	-

[106C]

誤用項目	1期	2期	3期	4期	傾向
助詞	36.4	27.8	50.0	21.1	△
接続表現	18.2	11.1	10.0	5.3	↓
自動詞・他動詞	-	-	-	-	-
T・A・V	18.2	5.6	0.0	0.0	↓
疑問詞節	0.0	5.6	0.0	0.0	↓
動詞選択	0.0	5.6	0.0	15.8	△
名詞選択	18.2	0.0	0.0	15.8	?
動詞活用	0.0	0.0	10.0	0.0	?
話体	0.0	5.6	0.0	5.3	△
副詞	9.1	16.7	0.0	5.3	△
連体修飾	0.0	5.6	20.0	0.0	?
発音・アクセント	-	-	-	-	-
名詞節	-	-	-	-	-
語順	-	-	-	-	-
不要な要素	0.0	5.6	0.0	10.5	△
意味不明な部分	0.0	5.6	0.0	0.0	↓
形容詞選択	0.0	0.0	0.0	5.3	?
指示詞	-	-	-	-	-
形容詞活用	0.0	0.0	0.0	15.8	?
文末表現	0.0	5.6	10.0	0.0	?
主語と述語の一致	-	-	-	-	-
その他の	-	-	-	-	-

[104C]

誤用項目	1期	2期	3期	4期	傾向
助詞	37.5	46.2	55.6	34.5	?
接続表現	6.3	7.7	0.0	17.2	△
自動詞・他動詞	0.0	0.0	11.1	0.0	?
T・A・V	6.3	5.1	0.0	10.3	?
疑問詞節	18.8	2.6	0.0	3.4	?
動詞選択	-	-	-	-	-
名詞選択	0.0	7.7	0.0	10.3	△
動詞活用	-	-	-	-	-
話体	6.3	2.6	22.2	3.4	△
副詞	6.3	2.6	0.0	0.0	↓
連体修飾	0.0	0.0	0.0	3.4	?
発音・アクセント	18.8	2.6	0.0	0.0	↓
名詞節	0.0	2.6	0.0	3.4	△
語順	0.0	0.0	0.0	3.4	?
不要な要素	0.0	5.1	0.0	3.4	△
意味不明な部分	0.0	0.0	11.1	3.4	?
形容詞選択	-	-	-	-	-
指示詞	0.0	2.6	0.0	0.0	↓
形容詞活用	0.0	7.7	0.0	3.4	△
文末表現	0.0	5.1	0.0	0.0	↓
主語と述語の一致	-	-	-	-	-
その他の	-	-	-	-	-

[107C]

誤用項目	1期	2期	3期	4期	傾向
助詞	29.4	26.7	35.3	48.0	↑
接続表現	5.9	0.0	14.7	8.7	△
自動詞・他動詞	0.0	0.0	5.9	4.0	?
T・A・V	11.8	0.0	2.9	4.0	↑
疑問詞節	0.0	6.7	0.0	0.0	↓
動詞選択	0.0	13.3	2.9	8.0	△
名詞選択	0.0	20.0	5.9	4.0	↓
動詞活用	11.8	6.7	5.9	4.0	↓
話体	11.8	0.0	5.9	0.0	△
副詞	0.0	6.7	0.0	0.0	↓
連体修飾	-	-	-	-	-
発音・アクセント	-	-	-	-	-
名詞節	5.9	0.0	0.0	8.0	?
語順	0.0	0.0	8.8	0.0	?
不要な要素	11.8	0.0	2.9	0.0	△
意味不明な部分	5.9	0.0	0.0	0.0	↓
形容詞選択	0.0	6.7	2.9	0.0	↓
指示詞	0.0	6.7	0.0	8.0	△
形容詞活用	0.0	6.7	0.0	4.0	△
文末表現	5.9	0.0	5.9	0.0	△
主語と述語の一致	-	-	-	-	-
その他の	-	-	-	-	-

表3：傾向ごとの学習者数（人）

誤用項目 学期 傾向	4 月 期					10 月 期				
	↓	↑	△	?	0	↓	↑	△	?	0
助詞			3	2		1	3	2	1	
接続表現			4	1		2		4		1
自動詞・他動詞	2		1		2				4	3
T・A・V		1	2	2		3	1	1	1	1
疑問詞節	3			2		3			3	1
適切な動詞の選択			3	2			1	2	3	1
適切な名詞の選択	1	1	1	2		2		2	3	
動詞の活用	1	1	1	2		2	1		3	1
話体	3			2		1		4	2	
副詞			4	1		5		1	1	
連体修飾	3			1	1	2			3	2
発音・アクセント	2	1		1	1	2	1		1	3
名詞節	2				3	1		2	1	3
語順	1				4	1			4	2
不要な要素	2			3		1		4	2	
意味不明な部分				1	4	3			2	2
適切な形容詞の選択				2	3	1			4	2
指示詞	2			2	1	1		2	3	1
形容詞の活用			1	2	2	3		3	1	
文末表現			2	1	2	2		1	2	2
主語と述語の一致					5	1				6
その他					5					7

表 4：誤用が消滅／出現した学習者数（人）

誤用項目	傾向 学期		前半 2 週で消滅		後半 2 週で出現		全期間とも出現		全期間出現せず	
	4 月期	10 月期	4 月期	10 月期	4 月期	10 月期	4 月期	10 月期	4 月期	10 月期
助詞					4	6				
接続表現			1			3				1
自動詞・他動詞	2			4					2	3
T・A・V		2	2		1					1
疑問詞節	3	3	1							1
適切な動詞の選択				3	2	1				1
適切な名詞の選択	1					2				
動詞の活用	1	1	1	1		1				1
話体	3	1	1		1	1				
副詞		4	1		1					
連体修飾	3	1	1	2					1	2
発音・アクセント	1	2	2	2					1	3
名詞節	2	1							3	3
語順	1	1		4					4	2
不要な要素	2	1	2	1						
意味不明な部分		3	1	1					4	2
適切な形容詞の選択			2	3					3	2
指示詞	2	1	2	1					1	1
形容詞の活用		1	3	1					2	
文末表現		2	1						1	2
主語と述語の一致	1								5	6
その他									5	7

いう形の出席状況となっていることが判明した。従って、個人のデータではこのような期のデータが欠損値となってしまうため、それを避けるべく本稿では、個人のデータの推移を考察する場合（表 2～4）、欠損値の生

じない学習者のみを対象とすることとし、4月期は学習者7名の内5名(中国4名、ポーランド1名)、10月期は学習者8名の内7名(中国5名、タイ1名、アメリカ1名)のみを採り上げることとした。

また、これらの学習者(4月期5名、10月期7名)についても、前稿と同じく、学期開始後3回分の同形式のタスクの各文法項目の誤用実数のデータを用いて4月期学習者と10月期学習者の文法能力に関する等質性をMann-WhitneyのU検定により測定した結果、両学期の学習者の誤用実数には有意水準5%で差が認められず、文法能力に関して統計的に等質であることが判明した。 $(\alpha=.05, Z=-.988, P=.323)$

さて、22項目中4月期に全体の誤用比率(表1)で減少傾向を示したものは、接続表現、自動詞・他動詞、T・A・V、疑問詞節、話体、連体修飾、名詞節、語順、指示詞、主語と述語の一致の10項目であった。これらの項目について学習者個人の傾向(表2・表3)と対照してみると、まず、4月期の対象者5名全員が減少傾向を示した項目は—5名全員が誤用無しの主語と述語の一致を除くと—一つもないことが解る。最も減少者が多い項目は疑問詞節、話体、連体修飾で、3名が減少傾向を示し、他の2名については、疑問詞節と話体では判断困難が2名、連体修飾では判断困難1名と誤用無し1名となっている。残る6項目中自動詞・他動詞、名詞節、指示詞が減少傾向2名で、このうち名詞節では残りの3名全員が誤用無しとなっているが、自動詞・他動詞では不安定1名と誤用無し2名、指示詞では判断困難2名と誤用無し1名となっている。また、語順は減少傾向1名で、残りの4名も全員誤用無しである。これらに対して、接続表現とT・A・Vについては減少傾向を示した学習者は1名もいない。接続表現は不安定4名と判断困難1名で、T・A・Vは増加傾向1名に不安定と判断困難がそれぞれ2名ずつという人数を示している。

また、10月期に全体の誤用比率(表1)で減少傾向を示したものは、疑問詞節、適切な名詞の選択、副詞、発音・アクセント、不要な要素、適切な形容詞の選択、文末表現の7項目であった。これらについても表2・表3から学習者個人の増減傾向と対照すると、4月期同様この学期の対象者7名全員が減少傾向を示した項目はなく、また、全員が誤用無しの項目もないことが明らかである。減少傾向の学習者が5名と最も多いのは副詞で、他の2名は不安定1名と判断困難1名である。他の項目を見ると、疑問詞節が減少傾向3名と判断困難3名と誤用無し1名、適切な名詞の選択が減

少傾向 2 名と不安定 2 名と判断困難 3 名、発音・アクセントが同じく減少傾向 2 名であるが増加傾向も 1 名あり、それに判断困難 1 名と誤用無し 3 名が加わる。文末表現は減少傾向 2 名と不安定 1 名に判断困難と誤用無しがそれぞれ 2 名ずつである。残りの不要な要素と適切な形容詞の選択は減少傾向が 1 名ずつであり、これに前者では不安定 4 名と判断困難 2 名が加わり、後者では判断困難 4 名と誤用無し 2 名を数える。

以上が各期で減少傾向を示した項目の、全体と個人のデータの対照である。

5. 考察－フィードバックの効果と項目の性格－

本章では、前章の記述をもとにフィードバックの効果と項目の性格について考察する。

5.1 学習者全体と個々の学習者の誤用比率の推移の相関性について

まず、1 章で述べた本稿の目的である全体での減少傾向と個々の学習者の減少傾向との関係、特に減少傾向が一部の学習者の急激な誤用の減少のみに依存するものであるかどうかについて考察を加えることにする。

5.1.1 4 月期の学習者に於ける相関性

前章で見た限りでは、全体での減少傾向と個人の減少傾向のデータが呼応するのは、表 2・表 3 から減少傾向と誤用無ししかデータがない名詞節と語順のみである。（主語と述語の一致に関しては対象者中に誤用を犯した者がいないため、ここでの考察の対象からは省く。）これらの誤用は 2 名の学習者（[42C] [44C]）の 2 期目のみに出現し、以後は現れていない。これらの誤用についてはフィードバックの効果よりも、誤用自体がそれほど重大ではない、矯正が容易なものであったと言うこともできる。

これ以外の項目では、5 名中 3 名が減少傾向を示す疑問詞節、話体、連体修飾についても全体の傾向と個人の傾向が概ね合致すると判断できる。

疑問詞節は判断困難が 2 名（[42C] [43C]）であるが、[42C] は 1 期～3 期まで誤用無しであるのに 4 期になって誤用が出現しており、この項目が必ずしも定着していないことが窺われる。これに対し、[43C] は 12.5→20.0→100.0→0.0(%) という極端な変動を示しているが、第 3 期の 100% はこの期のみ他の誤用が全く出現せずこの疑問詞節の誤用のみであったた

めにこのような数値になったものであり、誤用の実数で見ると $1 \rightarrow 2 \rightarrow 1 \rightarrow 0$ (個) と減少傾向にあることが見て取れる。従って、この項目も [42C] の定着度の問題はありますが、全体としては全体と個人の減少傾向がほぼ合致している。連体修飾は、誤用無し1名 ([43C]) と判断困難1名 ([42C]) で、[42C] が第3期のみで誤用を犯している。但し、この誤用も最終の第4期には消滅しており、前項と同様 [42C] の定着度の問題は あるものの学期を通して見た場合には一部の学習者のみの減少傾向に依存しているものではないと言える。さらに、話体について見てみると、これも判断困難が2名 ([41P] [44C]) であるが、これらの2名の傾向はかなり異なる。

[41P] の場合には、誤用は第3期のみで出現し最終第4期には消滅しているが、[44C] の場合には、全期間この誤用が出現しており、しかも、第4期で微減してはいるものの第1期から第3期までは増加している。ここから、この [44C] のみが他の学習者とは異なり、話体に関して初めから問題を有しておりかつフィードバックがかからない特異なケースであったと判断する方が適当であり、この特異例を含みはするが話体についても全体の傾向と個人の傾向は概ね一致すると考えられる。

減少傾向が2名の項目である自動詞・他動詞と指示詞については、前者は、他に誤用無しが2名 ([42C] [43C]) で、1名だけ不安定な学習者 ([45C]) がいる。ところが、この [45C] の誤用比率の推移を表2で見ていくと $8.3 \rightarrow 0.0 \rightarrow 5.9 \rightarrow 0.0$ (%) と変化しており、確かに不安定ではあるが変動値域としてみると第1期よりも低域で変動しており、比率が低下したと見ることも可能である。他方、後者に関しては、誤用無しが1名 ([42C]) で判断困難が2名 ([44C] [45C]) となっている。[44C] は第1期から第3期までは誤用が0でありながら第4期で出現しているのに対し、[45C] は第3期のみ誤用を犯しているが第4期には消滅している。第4期の比率に着目すれば全体と個人の比率の合致を認めることも不可能ではないが、[44C] の傾向を勘案すると、全体の傾向と一致すると言うことは難しい。

これらの項目に対して、残る二つの接続表現と T・A・V は明らかに問題を含んでいる。前者は、不安定4名 ([41P] [42C] [44C] [45C]) と判断困難1名 ([43C]) であり、このうち [41P] と [45C] についてはその変動値域で見た場合にはかろうじて不安定ながら減少傾向を示していると解釈することが可能であり、[44C] については (また [41P] と [45

C] も) 最終第4期で0となっているが、[42C] は第4期で急増しており、[43C] はそれまで0であった数値が第4期でのみ19.0%に達している。そのためか3期から4期にかけての減少率は減少項目中もっとも低い0.4%にとどまっている。ここから全体の誤用比率の推移と個人の誤用比率の推移の合致を主張するのは困難であると言わねばならない。同様にT・A・Vも、増加傾向1名([42C])と不安定2名([41P] [44C])と判断困難2名([43C] [45C])から成っており、特にこの項目で、不安定の2名には共に2期から4期までの変動値域が1期を上回って4期目で最高値に達する、変動値域で見ると増加傾向と解釈できる変化が現れているのが特徴的である。また、判断困難2名も[45C]は第4期で0となっているが、[43C]は1期から3期まで0であったのに最後の4期目で誤用が出現しており、以上から見て、接続表現以上に全体の傾向と個人の傾向の合致を認めることは不可能である。

以上から、4月期の誤用の減少傾向については、自動詞・他動詞、疑問詞節、話体、名詞節、語順、連体修飾の各項目に関して全体の傾向と個人の傾向が概ね合致すると認められる一方、指示詞、接続表現とT・A・Vの3項目に関しては前稿の考察が妥当しないと判断される。

5.1.2 10月期の学習者に於ける相関性

10月期に減少傾向を示した項目のうち、副詞のみ減少傾向5名に不安定1名([106C])と判断困難1名([101T])で、全体の傾向と個人の傾向がほぼ合致すると判断できる。

その他の項目では、減少傾向が3名の疑問詞節が、誤用無し1名([102A])と判断困難3名([101T] [103C] [104C])で、[101T]と[104C]は3期目で0となった誤用が4期目で再度出現しており、[103C]は4期で微減してはいるが2期から4期まで誤用が出現している。これらのデータを見る限り、疑問詞節は全体の傾向と個人の傾向の合致を認めることは難しく、むしろ矯正に成功した学習者と矯正がかかり難い学習者が明確に分裂したと見る方が適切である。

減少傾向が2名の項目である適切な名詞の選択、発音・アクセント、文末表現について見ると、適切な名詞の選択では、不安定な傾向を示している[103C]と[104C]は、その変動値域を見ても値域として減少傾向と解釈することはできず、判断困難な傾向の3名も[102A]は4期目で0

に収束しているが、[105C] と [106C] は4期でむしろ増加しており、この項目では全体と個人の一致を見ることは難しい。また、発音・アクセントは、誤用無し3名（[101T] [106C] [107C]）を別として増加傾向が1名（[103C]）おり、判断困難な [105C] は3期でのみ誤用が出現し4期目で0に収束しているが、この項目についても微妙ではあるが全体と個人との傾向が一致するとは言えない。文末表現では、不安定な [107C] の数値が5.9→0.0→5.9→0.0（%）と完全な横這い状態であり、その他の学習者では誤用無しの [101T] と [105C] を別とすれば、判断困難な [103C] で第3期までに0に収束した誤用が4期目で再度出現しており、[106C] では逆に3期までに増加傾向であった誤用が4期目で0になっている。減少傾向の2名（[102A] [104C]）とこれら3名の傾向を考え併せると5名中4名が4期目で0になっているが、全体の減少傾向と一致すると断定するには充分ではない。

残る2項目の不要な要素と適切な形容詞の選択は、ともに減少傾向を示した学習者が1名のみであり、他の学習者の傾向分布から見て、これらも全体と個人の傾向が合致するとは言えない。

以上から、10月期の項目では副詞のみ全体の傾向と個人の傾向に相関が認められるが、他の項目では前稿の結果が妥当しないと判断される。

5.2 フィードバックの効果／結果について

前節での考察から、前稿で提示した全体の減少傾向と本稿で示した個人の減少傾向は、学習者全員が等しく減少傾向を示すという形で合致することがないばかりか、項目によっては一特に10月期には一全く合致しないものがあることが明らかになった。従って、前稿で保留した「フィードバックの結果／効果」という表現は、本稿に於いて合致すると認められたものにしか適応することができない。この原因としては；

- 1）ここでの対象者に含まれなかった他の学習者の傾向の変動による影響
- 2）個々の学習者の、各期ごとのあるいは全期間を通じての他の誤用も含めた全体の誤用数という分母の変動による影響

の二つが考えられる。1）については、本稿2章でも述べた通り一部の欠損値を排除するために前稿で対象とした学習者と重なり合わなくなった部分があるが、結果としてこれが全体と個々のデータに齟齬を生じさせた可能性があり、また、本稿の問題となっている一部の学習者のみの誤用の減

少に依存した減少傾向が存在する可能性を示唆している。しかし、他方では、特に問題の10月期の場合、欠損値ゆえに排除した学習者は1名のみで、本稿で詳細に検討することはできないがこの1名のみが10月期に合致しなかった全ての項目で急激な減少傾向を示しているとは考え難く、むしろより多く2)の原因の関与が想定される。これに関連する事象としては先に4月期の[43C]でも見たように、ある項目で誤用が順当に減少してもその他の項目の誤用がこれに先んじて0に収束した場合には実数値では低減化していても%では増加傾向になることがあり得るからである。いずれが原因であるにしても、以上の事柄は今回の誤用の数値的な処理のあり方に対して方法論的な反省が必要であることを明示している。

しかしながら、なおそのような状況下でも4月期の方が全体と個人の傾向が合致する者が多い(その限りでは)フィードバックが一定の効果を有したことについては検討しておく必要がある。

4月期のフィードバックが10月期のそれと異なる点は、既に3-7)-bで述べたように、4月期にはフィードバック・テープとフィードバック用シートを使用し、学習者各自の誤用を耳から聴き取らせてその訂正案を検討させ、併せて重点項目について文法の復習を行ったが、10月期にはフィードバック・シートのみを使用し、文字化資料から訂正案を検討させるにとどめたことであった。今回のデータで4月期の重点項目であった接続表現とT・A・Vに減少傾向の相関が認められなかったことから文法の復習の効果については疑義を付さざるを得なくなったが、フィードバック・テープによる誤用箇所の聴取に関しては、前稿でも述べたように誤用の意識化を促進する上で効果があったと判定することができる。従って、ここから、誤用を低減化させる上でまず必要なことは音声(発話)の聴取による誤用の意識化であるということであり、これを前稿・本稿を通じてのフィードバックのあり方に関する一応の結論としておく。

5.3 項目の性格について

本節では、個々の項目の性格について前稿とは違った角度から採り上げて論じることにする。但し、全ての項目について論じるのではなく、今後の指導を考える上で重要と思われる項目に限定して述べてみたい。

表4で項目の分布を見てみると、まず、助詞で、両学期の学習者の殆ど(4月期5名中4名、10月期7名中6名)が「全期間とも出現」の欄に集

中しており、この項目が他の項目とは違った顕著な現れ方をしている。ここから、助詞の誤用は極めて出現し易くまた修復が極めて困難であることが明らかである。

他に両学期全期間誤用が出現した項目は、適切な動詞の選択と話体であるが、これらをよく見ると、4月期に全期間出現している誤用のうち、この適切な動詞の選択2名の中の1名と話体、そして副詞の1名は全て同じ学習者（[44C]）であり、また、10月期の場合も同じ学習者（[103C]）が、助詞、接続表現、適切な動詞の選択、適切な名詞の選択の全てに入っている。従って、ここから、この欄に該当する項目は、助詞を除いて、項目それぞれ自体が難しいと言うよりは、この欄に出現した学習者の誤用傾向の特徴であると判断するのが適切ではないかと考えられる。

つぎに、連体修飾、発音・アクセント、指示詞の3項目で、「前半2週で消滅」と「後半2週で出現」と「全期間出現せず」の三つの欄に学習者が現れている。人数には違いがあるが、このような出現傾向から学習者がこの項目に関して、大別するとフィードバックの吸収の早いタイプと定着が不安定なタイプと（ほぼ）定着しているタイプの三つに分裂していると考えられる。これらのうち、発音・アクセントは、今回のクラスでは一部のタスクで専門的なテーマを採り上げたことから比較的専門語彙に誤用が見られ、やむを得なかった面もあるが、分野や語彙の種類によってはJSP（Japanese for Specific Purposes）クラスで対応するという措置も考えられる。指示詞については、文脈指示の指示詞を一般に初級では充分扱わないこともあってこれらの誤用が見られたが、これなどは中級前半段階での指示詞の総括的な指導が必要であろう。連体修飾については、初級の学習項目であることを勘案するとこのような分裂形態になってしまう前に初級段階での徹底した指導と定着が必要である。

上記のような分裂形態が、ある意味でさらに進んだのが、不要な要素と適切な形容詞の選択で、前者は「前半2週で消滅」と「後半2週で出現」の欄に、後者は「後半2週で出現」と「全期間出現せず」の欄に分裂しており、これ以外＝この表4に現れない人数の学習者として不安定な変動を示すタイプが隠れていることになる。不要な要素については内容の確定が難しいため言及を控えるが、形容詞の選択については、連体修飾と同様初級段階での基本形容詞の十分な定着と、中級段階で新たに出てくる形容詞の的確な意味理解と適用対象・場面の理解と練習が必要であることがこの

データから読みとれる。

これらに対して、フィードバックによる修復が比較的容易であると読みとれるのは、一前節の判断と一部相違するところもあるが「前半2週で消滅」が両学期とも3名ずつとなっている疑問詞節である。他にこの欄に学習者が3名以上入っている項目には話体、副詞、連体修飾、意味不明な部分があるが、これらは一学期のみであり、連体修飾を除いては項目自体の性格として捉えるよりも学期差の大きい項目として捉えるべきであると考えられる。その他、一方が「前半2週で消滅」と「全期間出現せず」に収斂し、他方が「後半2週で出現」と「全期間出現せず」に収斂するという学期差の大きさを示した項目として自動詞・他動詞が挙げられる。他の項目について見られる差異も、ここでは、何らかの形で学期間の学習者の差異を反映するものとして指摘しておくにとどめたい。

以上で項目の性格についての考察を終わる。

6. まとめ－問題点と今後の課題－

本稿は、冒頭にも述べた通り、前稿の検討課題に解答を与えることが目的であった。それについては既に5章に記したのでここでは繰り返さず、この解答をふまえて新たな問題点と課題を述べておく。

まず、今回の分析では、既に述べたように誤用の数値処理の方法に問題点が認められた。欠損値の扱いやデータの表示の形式等技術的な問題ではあるが誤用の推移を的確に判定し得るためには不可欠な要素であり、今後の検討が求められる。

第二に、今回のフィードバックの効果に関する結論となった「音声の聴取による誤用の意識化」についても、今回の方法が最適であるかどうか検討し改善の方策を探る必要がある。さらに、今回音声聴取以外のフィードバックの効果については疑問を残す結果となったことから、効果測定等を含めたフィードバックの方法全般についてもあらためて検討し直す必要がある。これは、前稿で今後の課題とした「個々の学習者の情意面に配慮しつつ誤用訂正をクラス全体の学習事項とすることが可能なフィードバックの方法の案出」(中村1997:102)と関連する問題である。

最後に、最も重要な問題として考えられねばならないことは、そもそも会話が「上手い」と判定される要件は何かということである。筆者の授業は文法上の誤用が低減化することを会話の「上手さ」の一つと捉え、文法

項目のフィードバックを通してそれを実現させようという実践であったが、それが結果的には所期の効果を充分にもたらし得ず、金子（1998：76）の「自由に話しをさせて、出てきた誤りを訂正するだけでは、指導にはならない」ということばがそのまま当てはまる結果となった。しかし、より適切な方法でフィードバックを行い、文法上の誤用が0または非常に低減化したときそれが真に「会話が上手になった」状態なのであろうか。確かに文法上の誤用が皆無であるのは望ましいことである。しかし、原田・小池・小林（1998：8-9）と小池・原田・小林（1998：32-33）が明らかにしたところでは、学習者の会話（発話）に対する肯定的な評価は、むしろ円滑なコミュニケーションを進めるための要素に関わっている。このような観点を中心に据えて会話の「上手さ」の要件を析出し、それを指導とフィードバックに還元していくことが今後は必要とされる。

但し、このことは文法上のフィードバックが不要であることを直ちに意味するものではない。様々な実践から多様なフィードバックの方法・効果測定・因子の取り込み等のデータを集積し、より効果的なフィードバックの方法を探ることが今後の総括的な課題であると筆者は考える。

参考文献：

- 加藤由香里（1998）「視聴覚フィードバックを取り入れた会話クラスの試みー授業設計とその評価を中心にー」『日本語教育方法研究会誌』 vol.5 No.1 pp.2-3 日本語教育方法研究会
- 金子比呂子（1998）「話すことの指導」姫野昌子・小林幸江・金子比呂子・小宮千鶴子・村田年『ここからはじまる日本語教育』pp.67-86 ひつじ書房
- 倉八順子（1993）「効果的なスピーチ技術の指導へ向けての調査研究」『日本語と日本語教育』第22号 pp.49-64 慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター
- 小池真理・原田明子・小林ミナ（1998）「学習者の会話能力に見られる日本語教師と一般日本人のずれ」『日本語教育方法研究会誌』 vol.5 No.1 pp.32-33 日本語教育方法研究会
- 中村重穂（1997）「中級会話授業に於けるフィードバックに関する考察」『北海道大学留学生センター紀要』第1号 pp.83-105 北海道大学留学生センター

- 原田明子・小池真理・小林ミナ（1998）「一般の日本人は学習者の日本語をどのように評価するか」『日本語教育方法研究会誌』 vol.5 No.1 pp.8-9 日本語教育方法研究会
- 横井和子（1998）「学習者の発音上の問題点の指摘とその効果：大規模クラスを対象にした発音チェックとフィードバック」『平成10年度日本語教育学会春季大会予稿集』 pp.159-164 日本語教育学会
- 横林宙世（1992）「上級学習者の発話の誤りと訂正－訂正の実際とその心理を中心に－」『日本語教育学会創立30周年・法人設立15周年記念大会予稿集』 pp.49-54 日本語教育学会
- 横山和子（1996）「第二言語習得におけるネガティブ・フィードバックの役割：概観」『言語文化と日本語教育』 第12号 pp.1-12 お茶の水女子大学日本言語文化学会

なかむら しげほ（留学生センター日本語教育部助教授）

A study of feedback in an oral-communication class of intermediate Japanese • 2

NAKAMURA, Shigeho

In this paper, the author re-examines the results of feedback in NAKAMURA (1997) from the viewpoint of correlation between the total amount of errors in the class and the number of errors of each student.

As a result, the feedback held in the spring semester 1996-1997 was effective in reducing most of the grammatical errors of each student. But in the winter semester, the feedback was effective only in the reduction of errors concerning one grammatical point (adverbs) for each student. This difference of effect is thought to be based on the way different feedback methods affect consciousness-raising. Although the tape which was used only in the spring semester was effective, the other feedback methods do not seem to be effective, but the reasons for this are still not clear.

Finally, this paper points out some problems to be improved for intermediate oral-communication class and feedback.